

死ぬこと

あなたは、これまでに自分の死を考えたことがありますか。

自分が死ぬ、人が死ぬ、それは、どういうことだろうかと思つた
ことがありますか。

命が大切なのは、みんな知っています。

せつかくもらつた命だから大切にしていこう。

一日、一日を大切に生きていこう。

感謝して生きていこう。

いい言葉です。もつともだと思えます。

だけど、命とは何。なぜ、命を大切にしなければならないの。

どのように答えますか。

答えられないと思います。

死んでいく意味を知らないからです。命の意味を知らないからです。

昨今は、自殺願望の人が増えています。

死んでしまえば、今の苦しみから逃れられる、みんな消えてしま
う、生きていても悲しいだけ、苦しいだけと、絶望の中で、自ら死
を選ぶのです。

そして、その家族、近親者達は、死を選んだ人を追いつめた社会
や企業などに責任を求めていきます。

こんな悲しい、あつてはならないことは二度と起こしてはならな
い、こんなことは私達だけで充分だと世論に訴えます。

解決策は賠償です。

死ななければならぬ状況にまで追い込んだ社会が悪いなどの言
い分でしょう。

言い分、考え方、感じ方、思い方は様々です。

しかし、その人達が、命の本当の意味を知っていれば、そして、自分というものを本当に知っていれば、自らの今の時間を断つことはできません。

どんなに辛くても、どんなに悲しくても、自分で自分の命を絶つということは、自分に対して冷酷なのです。

そして、時間を断つことができると思っっている、その思いが無知なのです。

自分の時間は、自分そのものです。

そのことを知らないから、無知なのです。

時間を断つたのは、偽物の自分です。

偽物の自分が時間を断つても、自分の時間、本当の自分は絶つこ

とができません。

だから、断つても、断つても、苦しみから悲しみから逃れること
もできなければ、それらが消え去ることもないのです。

人は、いずれ、何らかの原因で死を迎えます。

自ら死を選ばなくても、死んでいくのです。

それが肉体という物体を持つてきた私達です。

いずれ、肉体の法則に従つて、その機能が止まる時期を迎えます。

医学の進歩で、その時期を、ややずらすことはできても、本来の
肉体の法則によつて、やがてその時期はやつてきます。

どんなに頑強な肉体を持つていても、健康増進に努力しても、偽

物の自分の思い通りにはいきません。

ましてや神や仏に、延命する力などありません。

また、憎まれっ子世に憚はばかるといっわけでもありません。

それぞれが決めてきた時間があるのです。

本物の自分が決めてきた時間に従って、すべてが動いているのです。

肉体を持つという時間は、限られた時間ですが、その中において、すべきことのために、すべてが動いています。

不必要なことは、何もありません。

その限られた時間内に、肉体を持ちたい、生まれてきたかったと切望してきた思いと出会うために、すべてが動いているのです。

そのような自分の思いに全く気付かずに、人は、好き勝手な生き方をしているだけです。

死んでしまえば終わりでは、あまりにも哀れです。

死んで花実が咲くものかと、懸命に生きていくことも哀れです。

生きている喜びは、肉体を持ちたい、生まれてきたかったと切望してきた思いを感じるところから、ふつふつと湧いて出てきます。

そうすれば、苦しみや悲しみはそのためにあったのに、それを放棄していくことがどういふことなのか、そして、また、限らない欲望の中に自らが溺れていくことがどういふことなのか、今、肉体を持つ喜びとともに、自分で分つてきます。本当の自分との出会いを果たすために、自分は今、生まれてきたことが分かっていると、死

んでいくということも、自ずと分かってくると思います。

つまり、肉体という物体は、時の経過とともに朽ち果てるという法則の中にあるから、その法則に従って、今の肉体を置いていけばいいだけのこと、それが死ぬということなのだということが、心で分かってくるのです。

逆に言えば、本当の自分との出会いを果たすことができなければ、死は、やはり恐怖でしかないと思います。

命の大切さも決して分らないと思います。

本当の自分との出会いを果たし、そして、今の肉体をいよいよ捨てる時期を喜びで迎える、これが、人としての理想の形です。

死を真正面からとらえることができるのは、ただひとつ、本当の自分を心で知ることです。

それ以外には、どんなに神を信じ、祈りを捧げ、成仏を唱えても無駄なことです。

死は恐怖ではありません。

人は、天国、地獄と言うけれども、本当にそういうものがあるのかどうかは知らないでしょう。

知らない、分からない、死ねば自分はなくなる、こういう状態では、死ぬことは、恐怖以外にはないと思います。

死に対して恐怖を持っている人が、なぜ、死んで天国で喜ぶことができるのか、なぜ、天国から自分達を見守ることができるのか、

あなたは不思議ではありませんか。

第一に、天国とか地獄とかは、どこにあるのでしょうか。

みんな、天国も地獄も自分の中にあることを知らずに、肉体を捨てていつているではありませんか。

肉体を自分だとするならば、その肉体の機能が止まってしまった時点で、自分は消滅します。

間違いなくそうです。そのまま時間が経過していくにつれて、肉体細胞は腐敗します。

焼いて骨になれば、その人の存在は本当に消えるのでしょうか。

人間というものを、自分というものを、どのようにとらえていくの

か、それによって、この世的なものを含めて、何もかもが違ってくる。

「自分は死んでも、自分は生きている。」

「自分は自分の中にしか存在し得ない。」

この言葉の意味を本当に自分の心で知る、感じていくことができれば、それが、いわゆる悟りということになりはしませんか。

いいえ、悟りという言葉など出さなくても、それが人間としての本来の姿なのです。

本来の姿をどこかに置き忘れてしまったから、死ぬということに對して、物々しく、仰々しく騒ぎ立てているのだと思います。

太古の昔から、死には、この世とあの世との橋渡しの思いが込められていたと思います。

ミイラとか、埴輪はにわとともに埋葬するとか、壁画、天井画にも、その思いが表現されてきたと思います。

そして、今もまだまだ、墓、戒名、供養、命日、それらを重んじることが死者の霊を重んじることであり、それは好ましいことである、そう信じ込んでいます。

現世の契りを来世にまでという思いを込めて、死者の霊を弔う人もあると思います。

すべては、形を本物とするところから発想されています。

ここで、断っておきますが、死ねば、形はなくなるけれども、霊

魂として生き続けるという考えも、形を本物とするところから発想されています。

人間を形としてとらえているのです。

従って、そこで言われる、**靈魂**、**御靈**みたまと、私が感じている意識、波動の世界とは、全く別物です。

形を本物とするところから発想する死というものは、暗いのです。

決して、喜びには結び付きません。

しめやかにお葬式が執り行われる、いつまでも涙に暮れている、その人を偲しのぶたびに涙ぐむ、みんな暗いではないですか。

暗い中で手を合わせて、なぜ、生きる勇氣だとか、元氣、愛を感じることができるのでしょうか。